

**①冷温停止したから大丈夫？の続き**

前回のメモ (No. 63) で「冷温停止状態になっても、注水が止まったら 3.11 悪夢の再開」と書きましたが「悪夢の再開までにどれ位の時間的余裕があるか？」を東電が試算しました。19 時間で水素発生温度の 1200 度になり、38 時間で燃料が熔融する 2200 度に達する、との試算です。小さい余震や通常の故障では問題なく対応できるでしょうが、安心できる状況には遠そうです。

**炉心注水停止後、38 時間で 2200 度に…試算**

東京電力は 10 月 1 日「福島第一原発 1～3 号機の炉心への注水が止まった場合、18～19 時間で燃料を覆う金属と水が反応して大量に水素が発生する 1200 度となり、30 時間後には圧力容器が溶け始める約 1800 度に達し、更に約 38 時間で燃料が再び溶け始める 2200 度に達する」との試算を発表した。燃料が再熔融すると、大量の放射性物質が原子炉から放出される恐れがある。ただ、東電は「ポンプやホースなど複数の機器が破損した場合でも 3 時間、1 台ならば 30 分程度で予備のポンプなどに切り替え、注水を再開できるため、再熔融の恐れはない」としている。(2011 年 10 月 2 日、読売新聞)

2011-10-2 記

**② 2 号機 “水素爆発ではなかった”**

今朝の NHK ニュースで「2 号機の爆発は水素爆発ではなかった」との報道がありました。福島 2 号機は、3/15 朝の 6 時過ぎに、格納容器下部の圧力抑制室付近で爆発音があり、水素爆発とされてきました。報道によると「地震計が観測したのは、ほぼ同時刻の 4 号機の水素爆発だけで、2 号機のもの観測されていない」という事実から「爆発事象はなかった」との結論です。水素爆発で生成されるのは水だけなので、水素爆発だったかどうかは、証拠が残りません。水素爆発では無くても爆発的事象はあった訳で、そうなると、当時、格納容器の内圧が 6 気圧程度だったので、圧力抑制室付近で破損が生じ、狭い破損箇所から一気に蒸気が噴き出した、ということが考えられます。格納容器の耐圧性能は 4 気圧程度なので、それ以上で破損したなら、やむを得ません。

しかし、原因が何であれ、格納容器が破損し、放射能を含んだ蒸気が一気に放出されたことで、福島近辺に大量の放射能汚染を引き起こしたことには変わりません。また、そもそも、こういう事態は、燃料が冷却されずに高温になったことから起きた訳です。その結果、大量の水素が発生したこと、また燃料が崩壊または熔融して、圧力容器底部、さらには格納容器底部に落下した、というシナリオも変わりません。

**2 号機 “水素爆発ではなかった”**

NHK-TV、10 月 2 日 7 時 43 分

福島第一原発事故について、東電社内の事故調査委員会が、「2 号機で起きたとされる爆発は水素爆発ではなかった」という見解をまとめていたことが分かりました。福島第一原発の事故では、3 月 12 日午後 1 号機が水素爆発を起こしたのに続いて、14 日午前 3 号機でも水素爆発が起き、15 日早朝に 2 号機と 4 号機でほぼ同時に爆発が起きたとされてきました。このうち 15 日早朝の爆発について、東電社内の事故調査委員会がまとめた中間報告案によると「爆発は、原発敷地内の地震計に記録されていた振動の分析から、午前 6 時過ぎの 1 回だけで、振動の波形などから 4 号機の水素爆発とみられ、2 号機では水素爆発は起きていない」ということです。ただ、2 号機は、ほぼ同じ時刻に原発の原子炉を収める格納容器の下部にある圧力抑制室の圧力が急激に下がっていることから、何らかの原因で圧力抑制室などが損傷したとみられるということです。

2011-10-2 記

### ③敷地外でプルトニウム検出

福島原発の事故で、大量の放射能が蒸気と共に流出した訳で、燃料が崩壊または熔融している以上、燃料物質も多少は同伴した可能性があるわけです。しかし、今まで、プルトニウムは原発敷地内でしか検出されていませんでした。今回、検出された地域は、地図を見ると、原発の北西側で、3.11以降の数日間に、ベントや2号機の爆発（正確には爆発的事象）で放出された放射能が、当時の降雨降雪で落下したものと考えられます。なお、この6箇所以外は「不検出」となっていますが、測定器の「検出限界以下」ということも考えられます。

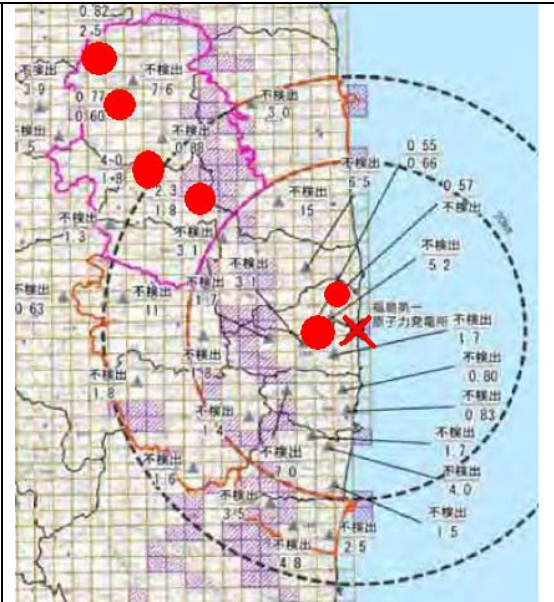
#### 原発敷地外でプルトニウム…福島・双葉など

文部科学省は、福島原発事故で拡散したとみられる放射性物質のプルトニウムが、原発敷地外の福島県双葉町、浪江町と飯館村の計6か所の土壌から検出されたことを9月30日明らかにした。

敷地外で、国の調査で原発由来のプルトニウムが検出されたのは初めて。同省では「いずれも低い濃度で、被曝量も微量」としている。

調査は、原発周辺の100か所が対象。6か所はいずれも警戒区域、計画的避難地域。

(2011年10月1日、読売新聞)



2011-10-2 記

### ④「無意味なストレステスト」の続き

7/11のNo.54メモで、「無意味なストレステスト」の記事を書きましたが、EUはストレステストの中間報告をだし「14カ国143基の原発全てについて、地震や津波（洪水）に耐えられる」と結論しました。元々、欧州は、数億年前の地盤で地震は殆ど無いし、川の洪水では大したことになりそうもないし、そもそも、原発立地でデタラメをしていない限り、合格するのは当然です。日本のストレステストも同じ結果になるでしょう。

#### EUの原発「閉鎖必要なし」…耐性検査中間報告

欧州連合（EU）が域内14か国の原子炉143基を対象に実施中のストレステスト（耐性検査）の中間報告が30日までにそろった。

深刻な欠陥は指摘されなかった。2012年6月にまとめる最終報告でこの内容から大きな変更がなければ、不合格となって閉鎖などに追い込まれる原子炉は一つもないとみられる。

EUは東京電力福島第一原発の事故を受けて6月、原子炉の設置基準を超える自然災害など「極限状況」への備えが十分かどうかをコンピューター上で点検するストレステストに着手。検査は原発事業者が行い、各国の規制当局がその結果を欧州委員会に提出した。（2011年10月1日読売新聞）

2011-10-2 記